

水口岡山城跡

発掘された伝本丸の二つの櫓台

伝本丸の東端と西端にはそれぞれ櫓台跡があります。現在はどちらも丘状の土壇となつていますが、発掘調査の結果、かつては石垣を備えた櫓台であったことがわかりました。

東櫓台の発掘調査では入隅角をもったL字状になる石垣を確認しました。東櫓台は単純な方形の櫓台ではなく、北東方向に張り出し部をもった構造であることが明らかとなりました。なお、このL字状の石垣は多くの瓦を含む土で覆われていました。廃城に伴って、石垣は埋められたようです。

西櫓台では石の階段を見つけました。階段は3段分残っていましたが、本来は4段だったと考えられます。階段の石には五輪塔などの石が転用されていました。石の階段の近くで見つけた石組溝の側石にも石仏が転用されており、西櫓台の周辺では寺院から転用された石材が目立ちます。なお、石の階段は東櫓台の石垣と同じように埋められていました。また、西櫓台の石垣は崩壊してしまっていますが、崩壊した石垣の状況から方形の櫓台だったことが想定されます。

このように、二つの櫓台は構造や石の使い方に違いがみられます。しかし、櫓台の規模に大きな違いはありません。高さも伝本丸の内側から見ると、どちらも1m程度であったと推定されます。



東櫓台のL字状の石垣



西櫓台の石階段と石組溝

出土瓦から見た城の変遷

東櫓台と西櫓台を中心に多くの瓦が出土し、これらの瓦から城の変遷が明らかになりました。

西櫓台の周辺では寺院から転用したとみられる瓦が多く、矢川寺遺跡（甲賀市甲南町）と同型の瓦が含まれていました。築城に際して、中村一氏が矢川寺から資材を調達したという『矢川雜記』の記載内容と合致します。

また、東櫓台の周辺からは大溝城（高島市）から運ばれた瓦と水口岡山城のために作られた瓦が出土しました。大溝城は文禄4年（1595）に廃城されたとみられており、三代目城主の長東正家の段階で大溝城から水口岡山城へ資材が運ばれたと推定されます。

これらのことから、西櫓は築城当初に中村一氏によって築かれ、東櫓は三代目城主の長東正家によって整備されたと考えられます。



西櫓台出土の瓦



東櫓台出土の瓦

天正13年（1585）、それまで甲賀の地を治めていた甲賀衆は、豊臣秀吉によって改易（武士の身分を剥奪する）処分とされました。この直後、秀吉は子飼いの家臣である中村一氏を岸和田城（岸和田市）から水口へ移し、甲賀の直接支配を行う拠点として水口岡山城を築城させました。

水口岡山城が築かれた古城山は、水口平野の喉元に位置する甲賀郡最大の独立丘陵であり、山頂からは水口平野や湖東平野を一望できるほか、湖北や湖西の山々とともに琵琶湖を眺めることもできます。

城が築かれた天正13年は、豊臣秀次が八幡山城（近江八幡市）を築城しました。中村一氏は秀次の信者にも任命され、豊臣政権による近江支配の一翼を担いました。この段階では近江が秀吉の勢力圏の東端にあたり、東海道を眼下に見据え、鈴鹿峠を望む立地は東国制覇の足がかりとして重要だったことでしょう。

秀吉が天下統一を果たした天正18年、中村一氏は駿府城（静岡市）へ移り、増田長盛が水口岡山城の城主となります。さらに、文禄4年（1590）には増田長盛が郡山城（大和郡山市）へ移り、城主は長東正家に替わります。長盛と正家は二人とも五奉行に名を連ね、政権運営の面で豊臣家を支えた重要な人物です。戦で武功を挙げた一氏から政権運営面で力を発揮した長盛・正家への城主交代は、豊臣政権内における水口岡山城の位置づけの変化を占めているかもしれません。

城内に残る石垣

水口岡山城跡の石垣は、廃城後に崩れてしまったものが多く、地表面では石垣を確認できる箇所は、せんげんまある 伝本丸北面側に5箇所、おおてのちの 推定大手道沿いの曲輪で1箇所の合計6箇所のみです。

伝本丸北面に残る石垣のうち、西側の石垣は帯曲輪を挟んで2段に分かれています。どちらの石垣も上部が崩れおり、当初の高さは不明ですが、現況地形から推定すると、上段の石垣は約8m、下段の石垣は約5mの高さだったと考えられます。なお、下段の石垣が高さ約4mと城跡に残る最大の石垣で、唯一、角が残る石垣です。角部は直角ではなく、地形に合わせて鈍角となっているのが特徴です。

また、伝本丸北面東側の食い違い虎口の箇所に残る石垣も上部が崩れていますが、当初の高さは8m程度だったと推定されます。

伝本丸の周辺以外では、城の南側にある枳形虎口の下方に位置する曲輪くるわに石垣が残っています。高さは約1mですが、伝本丸以外でも石垣が築かれたことを示す証拠となります。江戸時代初期に描かれた絵図の情報から、この付近には大手道と推定される登城路とせいろが通っていたと考えられ、水口岡山城跡では城の主郭しよかくとなる伝本丸とともに大手道の周辺にも石垣が築かれていたと想定されます。

水口岡山城に残る石垣には複数の種類の石材が使われていることが特徴です。白っぽい花崗岩、黒っぽい重晶石ホルンフェルス、青っぽいチャートが主なものです。築石は石垣の面が揃うように積まれていますが、大きさは均一ではありません。矢穴痕はわずかに認められる程度です。そのほか、五輪塔などを転用した石材もみられ、石垣を築くために石材を集めた様子が垣間見えます。なお、明確な石切場が見つまっているわけではありませんが、これらの石材は城の周辺で採取されたものと考えられています。

現況地形に残る城の痕跡

水口岡山城跡が立地する古城山には城にかかわる多くの遺構が残っています。山のいたるところで人為的に削平された曲輪と呼ばれる平坦面が確認できるほか、堀や土塁、石垣なども見ることができます。

東西方向に細長い古城山の山頂部には大規模な曲輪が5つ並んでいます。これらの曲輪は城の主要部を形成するものと考えられ、東から伝出丸・伝三の丸・伝二の丸・伝本丸・伝西の丸と呼んでいます。このうち、伝本丸がもっとも高い位置にあり、城の主郭しよかくと考えられます。また、5つの曲輪はそれぞれ堀切ほりきりなどによって区切られています。

伝本丸は東西約130m×南北約30mと細長く、東西の両端に櫓台やぐらだいが存在します。現況地形では丘状の高まりですが、もともとは石垣を伴った櫓台であったことが発掘調査で明らかになっています。また、伝本丸の北面側には石垣が点々と残ります。南面側は、現状では斜面ですが、発掘調査によって石垣が崩された状況が確認されています。これらのことから、伝本丸の周囲は石垣で囲まれていたと推定されます。

一方、伝西の丸の発掘調査では石垣ではなく、山の斜面を急斜面に成形した切岸きりぎしであったことが分かっています。伝本丸以外の主要曲輪では石垣が築かれていなかった可能性が高いと考えられます。

伝本丸の南側にある枳形虎口きはがたごちうは、中樞部への入口として機能したと考えられます。また、伝本丸の北と南には食い違い虎口も配置され、伝本丸を守るために強固な防御機能を備えていたことが分かります。

城の東側を見ると、堅堀が多く配置され、かたど 堅土塁が伴っている様子もうかがえます。東の斜面に対する防衛意識が表れているものとみられ、水口岡山城が秀吉の天下統一に向けた東国制覇の足かりとして築かれた意図と物語るのではないのでしょうか。



伝本丸北面の2段の石垣



伝本丸北面の下段の石垣



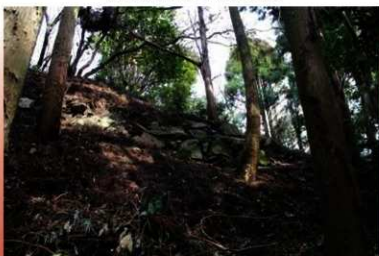
伝本丸の東櫓台



伝本丸の西櫓台



伝本丸北面の食い違い虎口と石垣



推定大手道沿いの曲輪の石垣



伝本丸と伝西の丸を区切る堅堀



伝本丸の北面の食い違い虎口

虎口の発掘調査

推定大手道に伴う枡形虎口と伝三の丸の虎口で発掘調査が行われています。

枡形虎口は伝本丸の南側に位置し、城の中核部へ入るための入口として機能した虎口です。ここでは発掘調査を行う以前は石垣を確認することはできませんでしたが、調査の結果、石垣が崩されて埋没していたことが判明しました。見つかった石垣のほとんどが1段目を残すのみでしたが、唯一、2段目の築石がひとつだけ残っており、その状況からほぼ垂直に積まれた石垣だったと推定されます。また、現在は土壁となっている部分では石を抜き取った痕跡があり、かつては石壁だったことが分かります。したがって、枡形虎口の内部は石で囲まれた空間だったと考えられます。

一方、伝三の丸の虎口では上方と下方の2つの石の階段と門の礎石を確認しました。2つの階段はどちらも幅約6mとみられます。また、門の礎石と礎石の距離が約4.5mであることから、間口2間半の門だったと想定されます。2つの石の階段と門は一直線に並びことから、伝三の丸の虎口は平入りの構造だったと考えられます。なお、門の周辺では多くの石が散乱した状況を確認していることから、虎口内部の壁面は石が積まれていたと推定されます。ただし、石の大きさが30cm前後と大きくないため、伝本丸で見られるような石垣ではなかった可能性が高いと考えられます。

推定大手道の枡形虎口は、発掘した石垣と地形の様子から虎口の内部で通路が直角に2回折れる構造だったことが分かりました。伝本丸の周辺には2箇所の良い違い虎口がありますが、これらも通路が2回直角に折れる構造で、枡形虎口と共通します。平入り構造の伝三の丸の虎口と折れを伴う伝本丸周辺の虎口では構造上の違いが認められ、各曲輪の性格の違いが虎口の構造に現れている可能性が考えられます。軍事的な性格が強い伝本丸と日常空間として使われた伝三の丸といった違いがあったかもしれません。

水口の礎を築いた城下町

水口岡山城の築城とともに山麓には城下町が整備されました。現在、通称「三筋町」と呼ばれる3本の並行する道が形づくる紡錘形の範囲が城下町の範囲と推定されます。西端を石橋、東端を円福寺付近としたことが後世の史料にもみられます。

また、江戸時代に描かれた絵図によると、城郭と城下町を区画する堀が山麓をめくり、そこには出入口となる枡形が3つ存在したことがうかがえます。3つの枡形については、中央を「大手」、西側を「西追手」、東側を「東追手」と呼んでおり、それぞれ、大岡寺の門前付近、水口小学校の正門付近、湯屋町の西側付近に想定されます。一方、山麓の堀については水口小学校の南側を流れる水路がその痕跡とみられ、かつて堀は城の西側から北側へ回り込んでいたようです。現在は宅地造成によって姿を消しましたが、昭和38年の航空写真には城の北西側に堀の痕跡とみられる三日月状の細長い池が確認できます。

関ヶ原の戦いの後に城は廃城となりますが、城下町は近世東海道の水口宿に引き継がれ、江戸時代を通じて宿場町として栄えていきます。城下町として整備された町のあり方は、町の区画や道として残り、現在の町の基盤を形成しています。



「大手」推定箇所



「西追手」推定箇所



山麓の堀の痕跡



垂直に積まれた枡形虎口の石垣



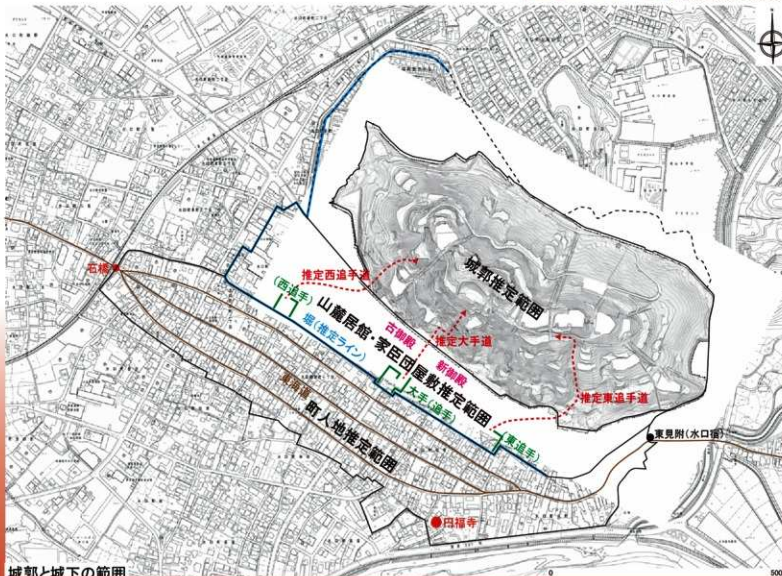
発掘された伝三の丸の虎口全景



伝三の丸虎口の下方の石階段



伝三の丸虎口の門（人が立っているのが礎石）



城郭と城下町の範囲

水口岡山城跡散策マップ

凡例

- 曲輪
- 堀
- 土塁
- 石垣
- 櫓台
- 散策路

